

# 第 I 部

## わが国を取り巻く 安全保障環境

### 第1章

#### 概 観

### 第2章

#### 諸外国の防衛政策など

### 第3章

#### 宇宙・サイバー・電磁波といった 新たな領域をめぐる動向・国際社会 の課題

# 第1章 概観

## 第1章

### 概観

## 1 現在の安全保障環境の特徴

現在の安全保障環境の特徴として、第一に、国家間の相互依存関係が一層拡大・深化する一方、中国などのさらなる国力の伸長などによるパワーバランスの変化が加速化・複雑化し、既存の秩序をめぐる不確実性が増している。こうした中、自らに有利な国際秩序・地域秩序の形成や影響力の拡大を目指した、政治・経済・軍事にわたる国家間の競争が顕在化している。

このような国家間の競争は、軍や法執行機関を用いて他国の主権を脅かすことや、ソーシャル・ネットワークなどを用いて他国の世論を操作することなど、多様な手段により、平素から恒常的に行われている。こうした競争においては、いわゆる「**ハイブリッド戦**」が採られることがあり、相手方に軍事面に止まらない複雑な対応を強いている。また、いわゆる**グレーゾーンの事態**が国家間の競争の一環として長期にわたり継続する傾向に

あり、今後、さらに増加・拡大していく可能性がある。こうしたグレーゾーンの事態は、明確な兆候のないまま、より重大な事態へと急速に発展していくリスクをはらんでいる。

第二に、テクノロジーの進化が安全保障のあり方を根本的に変えようとしている。情報通信などの分野における急速な技術革新に伴う軍事技術の進展を背景に、現在の戦闘様相は、陸・海・空のみならず、宇宙・サイバー・電磁波といった新たな領域を組み合わせたものとなっている。各国は、全般的な軍事能力の向上のため、また、非対称的な軍事能力の獲得のため、新たな領域における能力を裏付ける技術の優位を追求している。

さらに、各国は、人工知能 (AI) 技術、極超音速技術、高出力エネルギー技術など将来の戦闘様相を一変させる、いわゆるゲーム・チェンジャーとなり得る最先端技術を活用した兵器の開発に注力

## 解説 「グレーゾーンの事態」と「ハイブリッド戦」とは

いわゆる「グレーゾーンの事態」とは、純然たる平時でも有事でもない幅広い状況を端的に表現したものです。

例えば、国家間において、領土、主権、海洋を含む経済権益などについて主張の対立があり、少なくとも一方の当事者が、武力攻撃に当たらない範囲で、実力組織などを用いて、問題にかかわる地域において頻繁にプレゼンスを示すことなどにより、現状の変更を試み、自国の主張・要求の受け入れを強要しようとする行為が行われる状況をいいます。

いわゆる「ハイブリッド戦」は、軍事と非軍事の境界を意図的に曖昧にした現状変更の手法であり、このような手法は、相手方に軍事面にとどまらない

複雑な対応を強いることとなります。

例えば、国籍を隠した不明部隊を用いた作戦、サイバー攻撃による通信・重要インフラの妨害、インターネットやメディアを通じた偽情報の流布などによる影響工作を複合的に用いた手法が、「ハイブリッド戦」に該当すると考えています。このような手法は、外形上、「武力の行使」と明確には認定しがたい手段をとることにより、軍の初動対応を遅らせるなど相手方の対応を困難なものにするとともに、自国の関与を否定するねらいがあるとの指摘もあります。

顕在化する国家間の競争の一環として、「ハイブリッド戦」を含む多様な手段により、グレーゾーン事態が長期にわたり継続する傾向にあります。

している。

軍事技術の進歩は、民生技術の発展に依るところも大きく、民生技術の開発や国際的な移転が、各国の軍事能力向上に大きな影響を与える可能性が考えられる。今後のさらなる技術革新は、将来の戦闘様相をさらに予見困難なものにするとみられる。

第三に、一国のみでの対応が困難な安全保障上の課題が顕在化している。

まず、宇宙・サイバーといった新たな領域の安定的利用の確保が国際社会の安全保障上の重要な課題となっている。近年、各国においては、国全体としてのサイバー攻撃対処能力の強化が進められているほか、国際社会においては、宇宙空間やサイバー空間における一定の行動規範の策定を含め、法の支配を促進する動きがみられる。

また、海洋に関しては、既存の国際秩序とは相容れない独自の主張に基づいて自国の権利を一方

的に主張し、行動する事例がみられるようになっており、公海における航行の自由や上空飛行の自由の原則が不当に侵害されるような状況が生じているほか、各地で海賊行為などが発生している。

さらに、核・生物・化学(NBC)<sup>Nuclear, Biological and Chemical</sup>兵器などの大量破壊兵器とそれらの運搬手段である弾道ミサイルなどの拡散や国際テロの問題は、依然として、国際社会にとっての大きな脅威の一つとして認識されている。

また、19(令和元)年末以降中国で発生した新型コロナウイルス感染症は、国際社会が連携して対応すべき課題となっている。同ウイルスの流行は感染症対策の問題にとどまらず、各国の経済活動にも影響を及ぼし、さらには各国の軍事活動などにも様々な影響・制約をもたらしつつあり、同ウイルスが安全保障面に与える影響についても注目していく必要がある。

## 2 わが国周辺の安全保障環境

わが国周辺には、質・量に優れた軍事力を有する国家が集中し、軍事力のさらなる強化や軍事活動の活発化の傾向が顕著となっている。

また、わが国を含むインド太平洋地域の各国は、政治体制や経済の発展段階、民族、宗教などの面で多様性に富み、また、安全保障観、脅威認識も様々であることなどから、安全保障面の地域協力枠組みは十分制度化されておらず、地域内における領土問題や統一問題といった従来からの問題も依然として残されている。

朝鮮半島においては、半世紀以上にわたり同一民族の分断が継続し、南北双方の兵力が対峙する状態が続いている。また、台湾をめぐる問題のほ

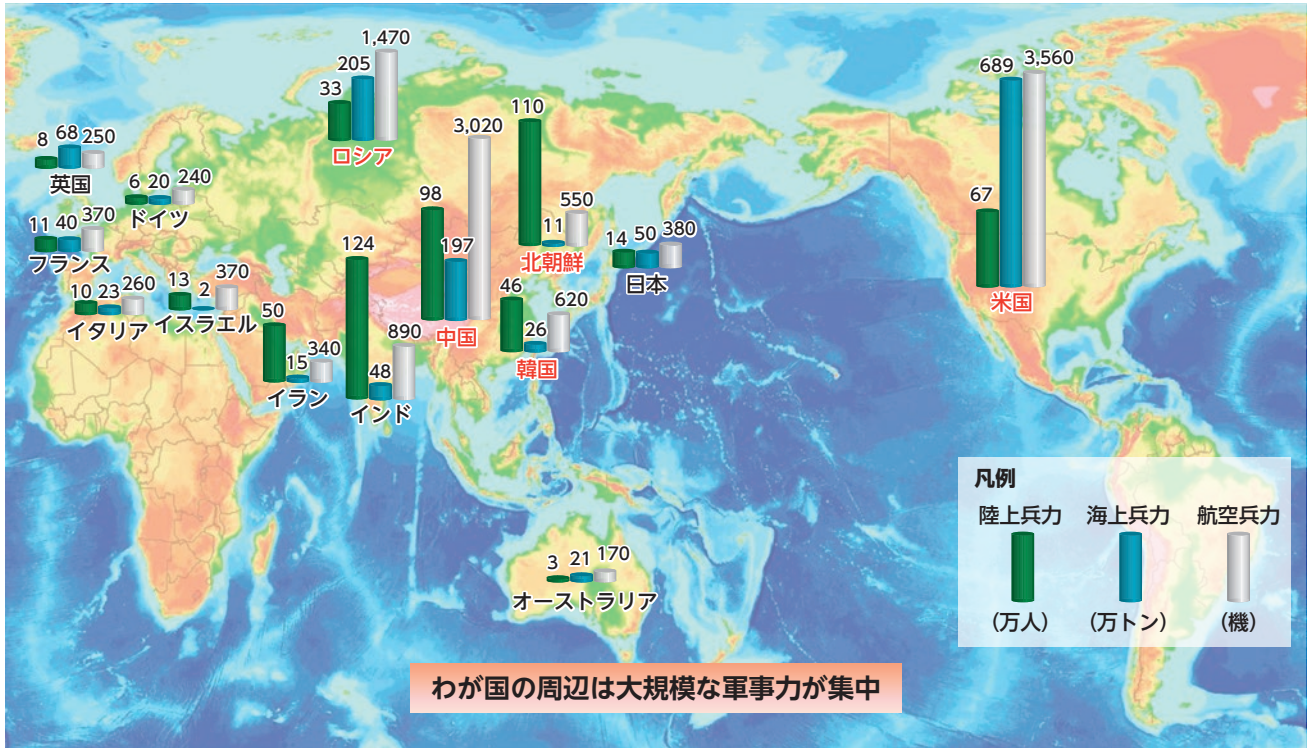
か、南シナ海をめぐる問題なども存在する。さらに、わが国について言えば、わが国固有の領土である北方領土や竹島の領土問題が依然として未解決のまま存在している。

これに加えて、近年では、領土や主権、経済権益などをめぐる、純然たる平時でも有事でもない、いわゆるグレーゾーンの事態が国家間の競争の一環として長期にわたり継続する傾向にあり、今後、さらに増加・拡大していく可能性がある。こうしたグレーゾーンの事態は、明確な兆候のないまま、より重大な事態へと急速に発展していくリスクをはらんでいる。



図表 I-1-1 わが国周辺の安全保障環境等

主要国・地域の兵力一覧(概数)



主要国・地域の兵力一覧(概数)

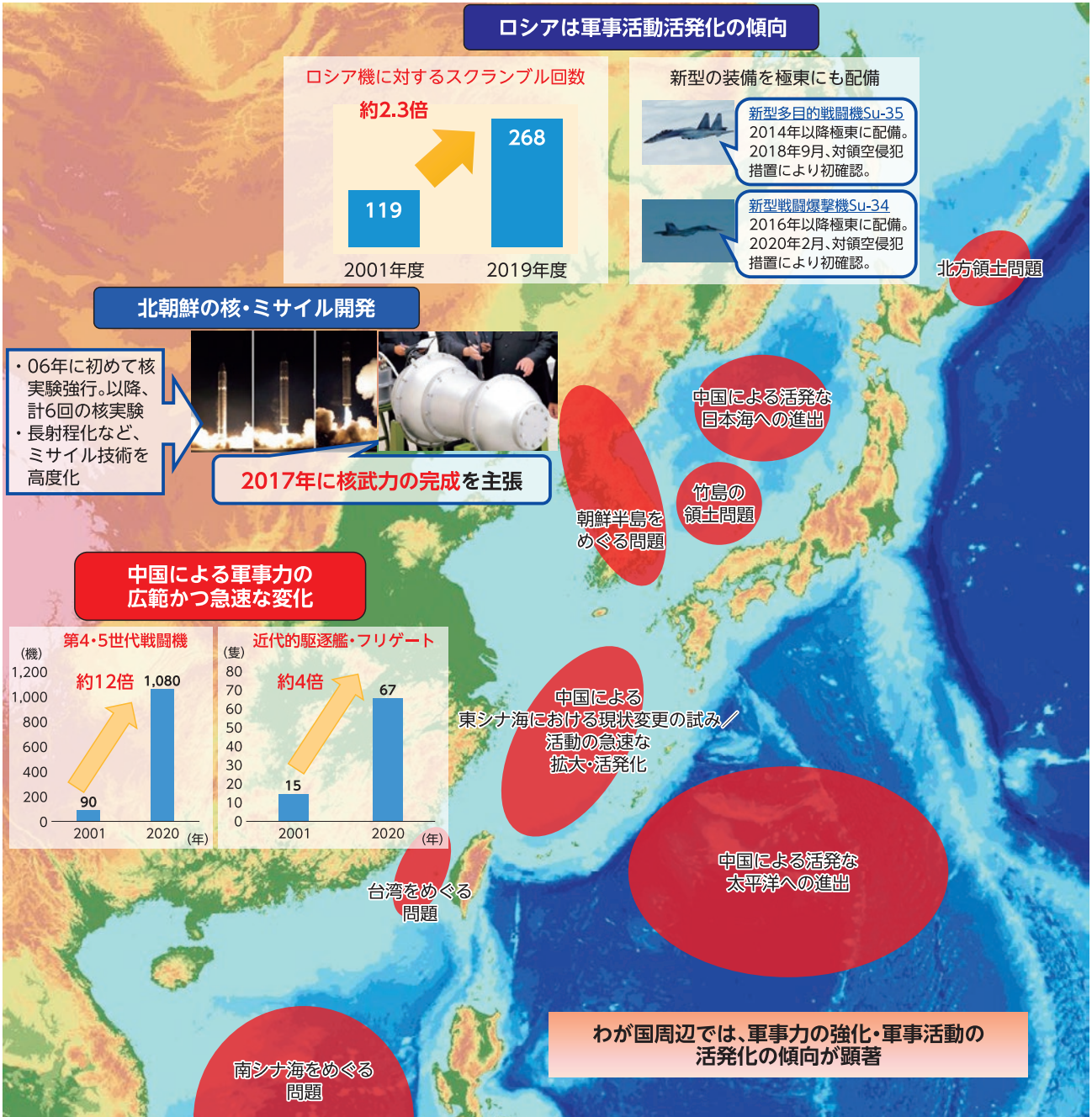
陸上兵力(万人)			海上兵力(万トン(隻数))			航空兵力(機数)		
1	インド	124	1	米 国	689 (980)	1	米 国	3,560
2	北朝鮮	110	2	ロシア	205 (1,130)	2	中 国	3,020
3	中 国	98	3	中 国	197 (750)	3	ロシア	1,470
4	米 国	67	4	英 国	68 (130)	4	イ ン ド	890
5	パキスタン	56	5	イ ン ド	48 (320)	5	韓 国	620
6	イ  ラ ン	50	6	フ  ラ ンス	40 (260)	6	エ  ジ プト	600
7	韓 国	46	7	イ ン ドネシア	28 (180)	7	北朝鮮	550
8	ベトナム	41	8	韓 国	26 (240)	8	台 湾	520
9	ミャンマー	38	9	イ  タ リ ア	23 (180)	9	サウジアラビア	440
10	ロシア	33	10	トルコ	22 (200)	10	パキスタン	430
—	日 本	14	—	日 本	50 (140)	—	日 本	380

(注1) 陸上兵力はMilitary Balance 2020上のArmyの兵力数を基本的に記載\*、海上兵力はJane's Fighting Ships 2019-2020を基に艦艇のトン数を防衛省で集計、航空兵力はMilitary Balance 2020を基に防衛省で爆撃機、戦闘機、攻撃機、偵察機等の作戦機数を集計

(注2) 日本は、令和元年度末における各自衛隊の実勢力を示し、作戦機数(航空兵力)は航空自衛隊の作戦機(輸送機を除く)および海自の作戦機(固定翼のみ)の合計

\*万人未満で四捨五入。米国は、陸軍48万人のほか海兵隊19万人を含む。ロシアは、地上軍28万人のほか空挺部隊5万人を含む。イランは、陸軍35万人のほか、革命ガード地上部隊の15万人を含む。

わが国周辺の安全保障環境



- 政治体制や経済の発展段階、民族、宗教など多様性に富み、各国の安全保障観や脅威認識も様々
  - ・ 十分に制度化された安全保障面の地域協力枠組みがない (⇔欧州、NATOによる集団防衛)
  - ・ 未解決の統一問題や領土問題 (例：朝鮮半島、台湾、南シナ海等)
- 近年、政治、経済、軍事にわたる 国家間の競争が顕在化
  - ・ いわゆる グレーゾーンの事態が増加・拡大する可能性。より重大な事態へと発展していくリスク

(注) 中国の「近代的駆逐艦・フリゲート」についてはルフ・ルーハイ・ソブレメンヌイ・ルーヤン・ルージョウの各級駆逐艦及びジャンウェイ・ジャンカイの各級フリゲートの総隻数。このほか、中国は42隻(20年)のジャンダオ級小型フリゲートを保有